周作人詩話四

松岡俊裕

周作人は南京遊学時代に『アリババと四十人の盗賊たち』を翻案し、『俠女奴（アラブ民間故事）』という題名で蘇州の『女子世界』[1]第八、九、十一、十二期（光緒三十一年七月［一九〇五年八月］、同年八月［同年九月］、同年十月［同年十一月］、同年十一月［同年十二月］）の各「文苑」「因花集」欄に連載した（編集長の丁初我潤色。丁初我は上海『小説林』の編集者でもあった）。署名は萍雲女士[2]。周作人は更にこの作品のために題詩七絶十首を賦し、『女子世界』第十二期に掲載された（「文学」「因花集」欄。署名は会稽碧羅女士[3]）。のち単行出版される（光緒三十一年五月初版[4]。署名は萍雲。題詩は未収。全四十七頁。二角。発行者は上海女子世界社。

写真　A

発行所は上海小説林総発行所。印刷者は東京並木活版所［浅草区黒船町二十八番地。在日浙江同郷会の機関誌『浙江潮』もここが印刷していた］。光緒三十二年三月再版[5]。写真Aは再版本の表紙[7]）。

翻案時期は光緒三十年（一九〇四）末から光緒三十一年二月にかけて。エドガー・アラン・ポー原作の『黄金虫』の翻案時期とほぼ重なっていた（訳書名『玉虫縁』。光緒三十一年四月初版[8]。署名は碧羅。丁初我潤色。全七十九頁。三角。上海小説林総発行所。印刷所は日本の翔鸞社。周作人は『山羊図』と命名したが、単行出版に当たって編集者の丁初我が改名した）。

周作人は南京に来る前は「尊王攘夷」思想を抱いていたが、南京に来てから厳復訳『天演論』を読んで進化論に触れるとともに、梁啓超の新民思想の影響も受け、西洋の自立自強思想、民主思想、個人主義を身につけていった。そして光緒二十九年（一九〇三）、全国的に学堂騒動が繰り広げられていた中で周作人は次第に民族革命や政治に目覚めていくが[9]、日本留学の希望が一旦頓挫した直後の同年八月大病を患い、一時紹興に帰郷。翌光緒三十年三月南京に戻るが、自身が大病を患って死線をさまよったこと等により周作人は天の道理（「弱肉強食」「自然淘汰」）が支配する人生に対して悲哀を覚え、生とともに死をも楽しむ「楽天主義」を抱く[10]。この「楽天主義」は、「楽死主義」（虚無主義）と「情」を重視する中国古来の「楽生主義」（游戯主義）とからなる。同年六月に祖父周福清が病

死したため再び帰郷し、留学中の長孫魯迅に代わって「孝子（コウシ）」を務める。自分に少からぬ影響を与えた祖父の死により周作人の悲哀は一層深まったに違いない。この時の帰郷中に地元の東湖通芸学堂で英語を教授（江南水師学堂の授業に英語があった）。こうした中で革命や政治に直接関与しようとする意欲は次第に失われ、その「楽死主義」が昂じて同年末には仏教者の楊仁山居士[12]に会ったり仏典を購入したりするようになり、一方「楽生主義」が昂じて『アリババと四十人の盗賊たち』、『黄金虫』の閲読と『侠女奴』、『山羊図』の翻訳がなされるに至った。その関心の所在が革命や政治から文学へ向かう時期は、魯迅の直接の関心が革命や政治から文学に変わった時期とほぼ重なっており、周作人の革命や政治から文学への転換に魯迅が何らかの役割を果たしたものと想像される。

さて、翻訳当時の『周作人日記』に見える『侠女奴』に関する記事を以下に列挙する。

・終日『侠女奴』を訳し、約三千字を得る。［十二月十五日］

・訳稿約三千字を書き写し、腕の力が脱けそうになる。［同月十六日］

・余、朝方に書を訳す。［一月一日］

この「書」とは『玉虫縁』のことかもしれない。

・丁初我からの手紙を受け取る。用件は『侠女奴』についてであり、新聞を一年分贈るとのこと。（この話は昨年の冬にあったが、余が固く辞退したため中止となった。だがついに断るわけにいかなくなった。十五日前後には届くという。）［二月十日］

・『侠女奴』を訳し終え、直ちに清書する。約二千五百字。全文で計一万字余り。直ぐ送るつもり。この件が済んで、重い荷を下ろしたようであり、甚だ心地よい。［同月十四日］

・初我に手紙を送る。小説を四枚同封する。これでもう済んだ。［同月十六日］

・初我の二十六日付手紙を受け取る。『山羊図』はすでに印刷に付し、『玉虫縁』と改名したという。また『侠女奴』は単行出版する予定ともいう。収入があれば、女子世界社を補助するとのこと。午後に手紙を書いてこれを承諾し、併わせて自分の考え全てを明言する。翌日発送する。［三月二十九日］

翻訳の原典は、『知堂回想録』四一「教師（一）」及び五一「私の新書（一）」によれば、ロンドンの紐恩斯（Newnes）公司発行の英文の絵入り本『天方夜談』（アラビアンナイト）。前者は『天方夜談』との出会い、『アリババと四十人の盗賊たち』の翻案と雑誌掲載、それに単行出版の経緯を次のように記している。

私は偶然英語本の『天方夜談』を入手し、外国語に対する興味を掻き立てられた。この本は私の無言の教師となった。もしこの本がなかったら、私は学堂［江南水師学堂］を飛び出して、ああした外国語の書もそっくり処分していたことであろう。軍艦勤務の一部の先輩は、例によって［英語の］本がなかったため、私のこの『天方夜談』を見て例外なく喜んだ。この本は転々と借覧されているうちにとうとう紛失してしまったが、それもやはり愉快なことであった。というのはこの本は私たちの多くに読書という趣味を教えてくれたからである。

私のこの『天方夜談』はロンドンの紐恩士公司発行の三シリング六ペンスの絵入り本である。子供への贈呈用の本であるため装丁が頗る華美であった。中に、アラジンが魔法のランプを手に持ったままアリババの女奴隷と短刀を振り回しながら踊っている絵があり、今でも大体覚えている。収められている物語

はどれも心が浮き浮きするほど奇怪千万な話であり、月並みな言い方だが、八歳から八十歳の年をとった「子供」に至るまで、誰もが一度読んだだけでたぶん忘れようがないものばかりであった。一番長い物語はシンドバッドが自ら語ったものである。大蛇が人間を呑み込んで木に巻きつき、人骨を締め砕いている様子と海辺のあの怪しげな老人が大蛇の首に跨り両手で首につかまっている様子はいかにも恐ろしげであった。中国では清末の大変早い時期に訳本が出ており、確か『航海述奇』という題名であったと記憶している。私はこれを読んで思わず「腕がむずむずし」、そこで『アリババと四十人の盗賊たち』で腕試しをした次第である。これは世界的に有名な物語であり、読んで実に面白かったので、次々に訳出した。翻訳ではあったが、訳文は古文であり、しかも誤訳に満ち削除した箇所も多数あった。先ず第一にアリババの死後、彼の兄弟のカシムがその妻を娶る下りである。これは元々古代から伝えられてきたセム族の習慣であるが、礼教に違うものと考え、削除した。第二に、あの女奴隷についてである。原文では、カシムが彼女を息子の嫁にしたとなっているが、訳文ではわざとその行動を奇異なものに変え、「行方知れずとなった」と記した。当時、私の同級生で友人の陳作恭君が蘇州で出版されていた『女子世界』を予約購読していた関係から、私は「萍雲」という女の名前で訳文をそこに送った。図らずもほどなくして分割掲載され、しかも後に単行本となった。書名は『侠女奴』。訳本のできはお話にならないが、これは私にとって最初の翻訳の試みであり、時も乙巳の年（一九〇五）の初頭であり、実に有意義なことであった。この訳本は『天方夜譚』からの引用ではあるが、換言すれば私が学堂で英語を学んだ成果でもあり、記念に値することである。

ここには「アリババと四十人の盗賊たち」を翻案した積極的な理由は明記されていないが、周作人は実は女奴隷モルジアナが主人公であるこの作品を利用して女性の自立と女権の確立に役立てようとしたのである。そのために題名も『侠女奴』と変えた。また周作人は、この作品により間接的に漢民族の奴隷根性を諷刺し、ひいては覆満興漢の民族革命にも役立てようとしたものと見られる。『侠女奴』の巻頭言は次のように記す。

モルジアナはペルシャの女奴隷であり、機敏で機転がきいた。その主人が偶然盗賊の洞窟に入り込んで殺され、盗賊が足跡を辿って家を捜し当てると、モルジアナは計略を巡らして盗賊を皆殺しにした。その勇ましい気概は中国の女侠客紅線「唐の人」のそれとよく似ている。深い奴隷の海にかくも非凡な人物がいるとは。亟かにこの作品を欧文から翻訳し、世間の生まれながらの奴隷根性の持ち主たちに告げることにする。

周作人は他に「アラジンと魔法のランプ」も訳出しようとしたが、挿絵に描かれているアラジンが辮髪を垂らしているのを嫌って断念したという（『知堂回想録』五二「私の新書（二）」）。

⑳　題『侠女奴』原本（七絶。十首）　会稽碧羅女士

本詩は物語の全体を十に分け、それぞれの内容を一首にまとめており、さながら章回体小説の回首句を集めたようなものとなっている（以下、詩は『女子世界』に掲載されたものによる）。

采得薪帰日暮時　薪を采（と）り得て帰りしは日暮るる時

緑林巣穴侈新知　緑林の巣穴の侈しきを新たに知る
敝囊満載馳驢去　敝囊を満載し　驢を馳せて去る
徼倖人間暴富児　徼倖にも人間にて暴富児となる

「采」は採に同じ、取るの意。「緑林」は盗賊の異名。「巣穴」は巣窟に同じ、盗賊の住処のこと。「侈」は多に同じ、多い、夥しいこと、ここは金銀財宝が多数あること。「敝囊」はボロ袋。「驢」はロバ。「徼倖」は幸運なこと、思いがけないこと。「暴富児」は俄か成金。

韻字は時、知、児、韻は支韻上平。

本詩は、ロバを連れて森に薪を採りに出かけたアリババが、夕方になって帰宅する途次、盗賊の巣窟で莫大な金銀財宝を見つけ、金貨の詰まった袋をロバに満載して帰宅し、俄か成金になったことを言う。

不意量金起禍胎　意はず　金を量りて禍胎を起こすとは
貪夫形役劇堪哀　貪夫は形役にして劇しく哀れむに堪ふ
石門不啓飛燐火　石門は啓かず　燐火飛ぶ
何処孤魂泣夜台　何処の孤魂　夜台に泣く

「不意」は思いがけないの意。「量金」は金貨の量を見積もること、ここはアリババの手に入れた金貨の量を見積もること。「禍胎」は禍根。「貪夫」は貪欲な男、ここはアリババの兄のカシムのこと。「形役」は肉体のために精神を使役すること、功名利禄に束縛されていることを言う。「石門」は盗賊の巣窟である岩屋の門のこと。「堪哀」は可哀に同じ、哀れむべきという意。「燐火」は鬼火。「孤魂」は弔う人のいない亡霊。「夜台」は墳墓、冥土。

韻字は胎、哀、台、韻は灰韻上平。

本詩は、貪欲なカシムが妻を通じて弟アリババの金儲けの話を知り、欲に目が眩んでアリババから盗賊の巣窟の在処と呪文を聞き出し、早速盗賊の巣窟に行き呪文を唱えて中に入ったものの、出る際の呪文を思い出せなかったため巣窟の石門が開かず、帰って来た盗賊に捕まって殺されたことを言う。

金銭費得喚縫尸　金銭を費やし　喚ぶを得て　尸を縫ふ
敵計雖深那得知　敵計は深きと雖も　那ぞ知るを得んや
不道春光終洩漏　道らずも　春光　終に洩漏す
粉書已上小罘罳　粉書す　已上の小さき罘罳に

「金銭費」は、お金を払うこと。「喚」は呼ぶこと、ここは靴直し屋を呼ぶこと。「尸」は死体、ここはカシムの死体。「那」はなんぞ、反語の言葉。「不道」は思いがけなく、図らずもの意。「春光洩漏」は秘密が漏れる、秘密を漏らす意、ここは靴直し屋が秘密を漏らしたということ。「粉書」はチョークで書く意、ここはモルジアナがチョークで扉に印を着けたということ。「已上」は以上の意、ここは盗賊が着けた以上のという意。「罘罳」は影壁（目隠し塀）に同じ（但し影壁は中国特有のもの。原文では単に「扉」とする）。

韻字は尸、知、罳、韻は支韻上平。

本詩は、アリババが盗賊に気づかれないようカシムの死亡時期を偽装するべく金貨三枚で靴直し屋を呼んでカシムの死体を縫合して貰い、その後盗賊の親分から派遣された子分の一人が靴直し屋を買収してアリババの家（元カシムの家）を捜し出し、扉に赤チョークで印を着け巣窟に戻るが、その印を見て不審を抱いたモルジアナが両隣の二、三軒の扉にも赤チョークで同じ印を着けて盗賊の目を眩

したことを言う。

一誤何堪再誤来　一たび誤りて　何ぞ堪へんや　再び誤り来れるを
朱門紅粉費疑猜　朱門の紅粉に疑猜を費す
巡邏終遣旁人覚　巡邏し　終に旁人をして覚らしむ
掩耳何曾有疾雷　耳を掩ふも　何ぞ曾て疾雷有らんや

「誤」は、ここは盗賊がモルジアナの機智によりアリババの家を見誤ること。「朱門」は朱塗りの門、転じて金持ちの家、ここはアリババの家。「紅粉」は赤チョーク。「費疑猜」は猜疑を抱くこと、疑うこと（主語は盗賊の首領）。「巡邏」は巡視、巡回すること（主語は盗賊の首領）。「遣」は使役の語。「旁人」は他人、第三者、ここは盗賊の首領。「何曾」は何嘗に同じ（反語）。「疾雷」は突然の雷鳴、転じて急な事。「何曾有疾雷」は、これほど急な事は初めてだの意（ちなみに「疾雷不及掩耳」は事の発生が急で防ぐ暇がない譬え）。

韻字は来、猜、雷、韻は灰韻上平。

本詩は、一人目の子分は失敗したため仲間に殺され、二人目の子分も同様にアリババの家を探り当てたものの再びモルジアナの機智に遭ってアリババの家を見誤ることになりこれも殺されたが、親分が直々出馬し同様にアリババの家を探り当てて赤チョークで印を着け今度は門前を何度も行き来して二度と見誤らないようよく観察したことを言う。

駆騾躑躅向前村　騾を駆り　躑躅して前村に向ふ
暴客俄為座上賓　暴客　俄に座上賓と為る

可惜一声何満子　惜しむ可し　一声の何満子
空教腸断売油人　教へを空しくし　腸の断てし売油人

「騾」はラバ。「躑躅」はさまようこと、うろうろすること。「前村」は前方の村。「暴客」は強盗、無頼漢、ここは盗賊の親分のこと。「座上賓」は招待客。「何満子」は詞曲名、元来は唐の開元年間中の滄州の歌者の姓名、歌者は死刑の執行に臨んでこの歌を進めて死を免れようとしたがついに免れず、のち歌曲となる（「一声何満子、双涙落胸前」）、ここの「一声何満子」は、子分がうっかり発したひと声、油が欲しくて袋に近づいたモルジアナを親分と勘違いして微かな声で「もういいんですかい」と答えたことを言うのであろう。「空教」は教えが空しくなる意、ここは親分が袋に入っている子分に石が当たったらナイフで袋を切り裂いて出てくるようにと伝えた命令が実行されなかったことを言う。「腸断」は腹わたが断ち切れんばかりに嘆き悲しむこと。「売油人」は油商人、ここは油商人に化けた盗賊の親分。

韻字は村、賓、人、韻は真韻上平（村のみ元韻上平。通用）。

本詩は、盗賊の親分が子分たちを入れた袋三十七個と油入りの袋一個を十九頭のラバに積んで出発し、町に着いた後、あちこち引き回してからアリババの家に行き、油商人になりすましアリババを騙してその客となり、途中で抜け出して袋の中の子分たちに「窓から石を投げるから、今日のために研ぎすましたそのナイフで袋を切り裂いて出てくるように」と言いつけたものの、子分はもてなし用のスープ作りのための油がきれたので油商人の運んできた油を拝借しようと袋に近づいて来たモルジアナをてっきり親分と勘違いして「もういいですかい」と囁いたことを言う。

請君入甕已堪傷　君に甕に入るを請ひ　已だ傷むに堪ふ
灌頂醍醐那可当　醍醐を頂に灌げば　那ぞ当たるべからん
三十七人斉併命　三十七人　斉しく命を併つ
殉財千古弔金倀　財に殉じて千古となり　金倀を弔ふ

「請君入甕」は自分が講じた方法に自ら引っかかること、相手の方法で相手をやっつけること（ここは無論子分たちが袋に入っていることを踏まえている）。「已」は甚だ。「堪傷」は可傷に同じ、痛ましいという意。「灌頂醍醐」は「醍醐灌頂」とも言い、もともと仏教用語で、「醍醐」（チーズ）を「灌頂」（人の頂に液体を注ぎ込む意）すること、ひいては人に知恵を注ぎ込むこと、後には人を快適な心地にさせる意をも持つ、但し「醍醐」の原文は無論煮えたぎった油であり、ここは［モルジアナの］優れた智慧という意味も兼ね持っているものと見られる。「那」はなんぞ（反語）。「当」は対処する、防ぎ止めること。「併命」は命を失う意。「殉財」は財物のために命を捨てる意。「千古」は死を悼む時に使う語で、永遠の別れとなる意。「倀」は鬼（亡霊）の名で、虎に食い殺された人の霊魂、虎に食い殺されると虎の手先になって悪事を働くという、転じて悪人の手先、ここは後者、「金倀」で金の亡者たる悪人の手先の意、ここは殺された盗賊の子分たちを指す。

韻字は傷、当、倀、韻は陽韻下平。

本詩は、モルジアナが袋の中の声に吃驚したものの、とっさに事の次第を察して「まだまだ、だけどもう直ぐだからな」と答え、次々に言いくるめて最後に油入りの袋を捜し当て、油を煮えたぎらせると、その煮えたぎった油を全ての袋に注ぎ込み、その結果子分全員が窒息死し、アリババとモルジアナが彼らの死体を庭の隅に埋めたことを言う。

対門僑寓費深心　門に対ひて僑寓し　深心を費す
揖盗多従孺子嬰　盗を揖め　多く孺子嬰に従ふ
汝欲報恩儂報怨　汝は恩に報ひんと欲し　儂は怨に報ひんとす
両家情事不分明　両家　情事分明ならず

「対門」は門向かいにの意、ここはアリババの家の向かいにということ。「僑寓」は仮り住まいすること。「費深心」は深い考えを巡らす意（主語は盗賊の親分）。「揖盗」は盗品を集める意、ここは盗賊の親分が盗品たる高価な織物や立派な布地類を集めての意。「多」は何度もの意。「従」は近づく、寄り添う、なつくの意。「孺子嬰」は前漢の第九代皇帝宣帝の玄孫（曾孫の子）、王莽は第十三代皇帝平帝を殺すと嬰を立てて後継者とした、時に嬰は二歳、孺子は号、王莽は摂政となり、立帝の二年後に嬰を廃した、後漢の建武元年に平陵の方望が嬰を擁立して皇帝としたが、更始年間に派兵してこれを殺した、ここは跡継ぎの意、アリババの亡兄カシムの店を嗣いだ、アリババの息子のこと。「汝」は盗賊の親分のアリババに対する二人称。「報恩」は恩に報いる意、ここはアリババが自分を助けてくれたモルジアナに酬いるということ。「儂」は古代呉語で私の意、ここは盗賊の親分の自称。「報怨」は恨みを晴らす意、ここは盗賊の親分がアリババに恨みを晴らすということ。「両家情事」は、アリババの家と息子の家がどちらも状況をの意、両家の状況をの意味ではない。「分明」は明かである、判然としている。

韻字は嬰、明、韻は庚韻下平。

本詩は、盗賊の親分がアリババを殺すべく、一旦盗品たる高価な織物や立派な布地類を自宅に集めた上で、アリババの息子が移り住んだ元のカシムの店の真向かいの家を偶然借り受けて、それらの品を新居に移して商人を騙ると、アリババの息子に接近して贈り物をあげたり食事に招いたりしたことをいう。

姓名仮託苛琪亜　姓名を苛琪亜に仮託す
監察難逃史拉夫　監察するに　史を逃れて夫を拉するは難し
再入侯門非易事　再び侯門に入るは　易き事に非ず
却教空送好頭顱　却て　空しく好き頭顱を送らしむ

「苛琪亜」は盗賊の親分が名乗った偽名、コジア（・フッサン）。「監察」は目をつけて調べること。「逃」は隠すこと。「史」は事柄、事情、実状の意。「拉」は強制的に連行すること。「夫」は男、ここはアリババのこと。「侯門」は貴族や高官の邸宅、ここはアリババの家。「空」は無駄に、むざむざの意。「送」は駄目にする、壊すの意。「頭顱」は頭、「送頭顱」で命を捨てる意。

韻字は夫、顱、韻は虞韻上平。

本詩は、コジア・フッサンと名乗った盗賊の親分が、アリババの家の様子を窺った結果、アリババを騙して拉致するのは難しいと判断したものの、一旦アリババの家に入ったが最後、命を落としてしまったことを言う。

居然妙手勝空空　居然として　妙手空空に勝り
舞踏蹁躚唱懊儂　舞踏すること蹁躚にして　懊儂を唱ふ
羯鼓冬冬声忽断　羯鼓冬冬として　声忽ち断ち
筵前血洒杜鵑紅　筵前に血洒ぎ　杜鵑の紅のごとし

「居然」は突然、俄かに、なんと、意外にもの意。「妙手」は優れた手腕、巧みな手法の意、ここはモルジアナの盗賊の親分をやっつけるための巧妙な計画のこと。「空空」は何も無いこと、ここは「空空児」（泥棒、盗賊、つまり盗賊の親分のこと）のこと。「蹁躚」は軽やかに舞う様。「懊儂」は古楽府の「懊儂歌」のこと、悔恨の心情を詠んだものが多いとされる。「羯鼓」は楽器名、腰鼓の一種、肩から前に吊り下げ両手に持ったバチで両鼓面を打つ。「冬冬」は太鼓の音。「筵前」は酒宴、宴席の前にの意。「血洒」は血が注がれること。「杜鵑紅」は「杜鵑」（サツキ、アカツツジ）の赤さ、「杜鵑」のような赤さという意、または「杜鵑紅」で牡丹の一種、いずれにせよ血の色を言う。

韻字は空、儂、紅、韻は東韻上平（儂のみ冬韻上平。通用）。

本詩は宴席でアリババを酔わせて殺そうと目論んだ盗賊の親分が逆にモルジアナの奇計にはまって命を落とした時の様子を詠ったものであり、モルジアナが宴会後の余興の席で短刀と小太鼓を手にして踊り狂い、隙に乗じて盗賊の親分を刺し殺したことを言う。

行蹤隠約似神龍　行蹤隠約として　神龍の似し
紅線而今已絶蹤　紅線　而今已に蹤を絶つ
多少神州冠帯客　多少の神州の冠帯客
負恩愧此女英雄　恩に負きて此の女英雄に愧づるや

「行蹤」は行動、動き、行方、行く先、ここはモルジアナの行方を言う。「隠約」はぼんやりしていること、はっきりしていないこ

と。「似」は～の如し、～のようだ、～に似る。「神龍」は不思議な龍、「神龍見首不見尾」は現われては消え消えては現われ捉え難いこと、ちらりと姿を見せるだけで実態を捉え難いことを言う。「紅線」は、この場合いわゆる赤い糸（男女間を繋ぐ縁の糸）のことではなく、唐代の女侠の名、ここは紅線のような女英雄のことを言う、故事『紅線金合』（唐の楊巨源の『紅線伝』に基づく）は唐の潞州の薛嵩の青衣（婢女のこと）紅線が、潞州の併合を狙っていた魏城の田承嗣の寝室に忍び込んでその枕元にあった合金を盗み出し、その結果田承嗣の潞州併合の野望が断たれるとともに、主人の薛嵩が朝廷により潞州の節度使に任命されるという話、明の梁伯龍は楊巨源の『紅線伝』に脚色を加えて戯曲『紅線女雑劇』を作った。「而今」は現在、今日の意。「已」はすでに。「絶蹤」は全く無くなること。「多少」はどれだけのという意味（反語であり、どれほどもいない、ほとんどいないということ）。「神州」は中国のこと。「冠帯」は冠と帯、転じて朝廷から冠帯を賜った役人、士大夫、紳士のこと、「客」は士、人の意、「冠帯客」で役人、士大夫、紳士のこと。「負恩」は恩を忘れること、ここは中国の役人等の士大夫たちが唐代の紅線が施してくれた恩に背いて中国の併合を狙っている諸外国に対して積極的に対処しようとしないことを言う。「愧」は恥じること、魯迅の初期の作品、ギリシャ同盟軍とスパルタ軍がテルモピレーで戦った際、逃げ帰った夫を死をもって諫めた妻のセレーヌを描いた「スパルタの魂」の序文に「我、スパルタの魂に恥ず」（「吾辱斯巴達之魂！」）という文句がある。「女英雄」はモルジアナのこと。

韻字は龍、蹤、雄、韻は冬韻上平（雄のみ東韻上平。通用）。

本詩は、モルジアナが行方知れずとなった[13]こと、中国ではすでに紅線のような女丈夫は完全に姿を消したこと、役人などの士大夫たちのほとんどが紅線がかつて施してくれた恩に背き中国の併合を狙っている諸外国に対して果敢に対処しようとしないことを言う（更には、役人たちが満州人による漢民族支配の現状に甘んじていることをも言っているものと見られる）。

訳　『侠女奴』原本に題する

薪を採って家路に着いたのは日暮れ時のこと
盗賊の巣窟に莫大な財宝があるのを発見した
ボロ袋に財宝を満載し　ロバを走らせて去る
なんと幸運にも　この世で俄か成金になれた

料らざりき　お金に目が眩んで禍を招くとは
貪欲な男は利禄に囚われ　実に哀れむべきだ
巣窟の石門は開かず　殺されて鬼火が飛んだ
祭る者のない孤魂が墳墓で悲しみ泣いている

金で靴直し屋を雇いカシムの遺体を縫わせた
盗賊も知恵が回ったが　見破られる筈がない
意外にも靴直し屋が秘密を漏らしてしまった
しかし盗賊が着けた以上の小扉に印を着けた

一度は見誤ったが　失敗の繰返しはもう御免
富家の門上の赤チョークの印に　疑問を抱く
親分は門前を行き来しよく観察して見破った
こんなに危急なことに遭った試しは全くない

ラバを駆り　うろうろしつつ前方の村に向う
盗賊の親分は俄にアリババの招待客となった
残念ながら　子分たちはうっかり声を発した
命令が無駄になり　断腸の思いの油売り商人

自ら講じた手に自ら引っかかるとは痛ましい
頭に注がれた油に　どうして対処できようか
盗賊の子分たちは　三十七人全員命を失った
財物のために命を失った子分たちを埋葬した

アリババの家の向いに住んで悪巧みを巡らし
盗品を集め頻りにアリババの息子に取り入る
汝は女奴隷の恩に報い俺は汝に恨みを晴らす
父子の家はどちらも悪企みに気づいていない

変装して町へ出かけ偽ってコジアと名乗った
アリババを騙して連れ去るのは難しいようだ
だが再びアリババの家に入り込むのも困難だ
入ったが最後立派な命を捨てることになった

なんと女奴隷の奇計に親分は負けてしまった
軽やかに舞い踊りながら懐儂歌を歌い続ける
鳴り響いていた太鼓の音が　不意に途切れた
宴席の前に杜鵑（つつじ）の如き真赤な血が飛び散った

モルジアナの行方は次第に分からなくなった
中国でも紅線は今や全く姿を消してしまった
どれだけの中国の士大夫が紅線の恩に背いて
いることをこの女英雄に恥じているだろうか

丁度『侠女奴』の翻訳に取り組んでいた頃のこと、光緒三十年の小除（大晦日の前日。この年は十二月二十八日。新暦一九〇五年二月二日）と除夕（大晦日。この年は十二月二十九日。新暦一九〇五年二月三日）に周作人は詩を各一首詠んで除夕の日記に記した。当日の日記は次の通り。

除夕である。夜、堂中にて飲む。食事後、立夫［不詳］と共に提灯を手にして下関[14]をひと巡りする。部屋に戻ってまた酒を飲み、四鼓［午前二時］に寝る。今年も終わろうとしているが、余が情に感ずるのはどうしたわけだろう。恐らく一種の楽生主義にすぎないのだろう。この考えは、除夕に余が詠んだ［略。第二首五律］という詩に見える。だが余の主義は僅に生を楽しむだけではなく（この楽は快楽説を主としている）、併わせて死をも楽しんでいる（歓楽説を主としている）。この考えは、小除の［略。第一首七絶］という詩に見える。

この他、文中に見える周作人の「楽生主義」と「楽死主義」、なかんずく後者に関わる記事がこの年の年末から年始にかけての『周作人日記』に散見する[15]（前述したように楊仁山居士に会ったり仏典を購入したりするようになるのはこの年の年末のことである）。

㉑　除　夕（七絶一首。五律一首）

一年倏就除　一年倏ち除に就く
風物何淒緊　風物　何ぞ淒緊たる
百歳良悠悠　百歳　良に悠悠たり
白日催人尽　白日　人の尽きんとするを催す
既不為大椿　既に大椿為らざれば
便応如朝菌　便ち応に朝菌の如くなるべし
一死息群生　一死をもって群生息まば
何処問霊蠢　何処にか霊蠢に問はん

「倏」は忽ちの意。「就除」は除夕を迎える（なる、近づく）の意。「風物」は景色のこと。「何」は、なんと～ではないか、感嘆文。「淒緊」は淒じく厳しい様、身が引き締まるような感じを与える様子のこと。「良」は誠に、本当に、実にの意。「悠悠」は、ゆったりとして遥かなこと。「白日」は白昼、輝く太陽、夕陽の意、ここは夕陽のこと。「催」は促すの意。「人」は、作者自身のこと。「尽」は滅びる、死ぬの意。「既」は、～である以上の意、次句の「便」で受けている。「大椿」は上古の大木の名で、春夏秋冬三万二千年が普通の一年に当たる、転じて長寿の意（大椿寿に同じ）。「応」は、まさに～すべし、当然～になる筈だの意。「朝菌」は朝糞上に生え晩に枯れる芝菌或いは水中に生ずる朝生暮死の虫、転じて寿命の短いこと。「一死」は一度の死、一挙に死ぬこと。「息」は滅びること。「群生」は人類のこと。「何処」は反語で、どこに行ったら～できるだろうか、どこでも～できないの意。「問」は追及する、責任（罪）を問う、弾劾するの意。「霊蠢」は霊椿（大椿に同じ）のもじりであり、無意味に長生きする愚か者のこと。

韻字は緊、尽、菌、韻は軫韻上声。

東風三月煙花好　東風三月　煙花好し
秋意千山雲樹幽　秋意千山　雲樹幽かなり
冬最無情今帰去　冬は最も無情にして　今帰り去る
明朝又得及春游　明朝に又春游に及ぶを得ん

「東風」は春風のこと。「三月」は無論旧暦であり、晩春。「煙花」は霞と花で、春景色をいう。「秋意」は秋の趣、秋の気配。「千山」は多くの山々、深山の意。「雲樹」は雲がかかった樹木のこと。「幽」は静寂である、ひっそりしているの意。「春游」は春のピクニックのこと。

韻字は幽、游、韻は尤韻下平。

訳　除　夕

一年たって忽ち除夕となる
景色はなんと淒じく厳しい
百歳は実に悠々として長いが
夕陽は私が死ぬよう催促する
私は長寿でないからには
朝菌のように短命な筈だ
人類が一挙に滅びてしまえば
長寿の愚か者の罪は問えない

春風が吹く三月は霞と花の景色がなんとも素晴らしい

秋の気配が漂う深山には雲樹がひっそり広がっている
冬は最も無情であるけれど今去って行こうとしている
明朝には再び春のピクニックに出かけることができる

さて周作人は、たぶん「除夕」詩を詠んだ翌年、光緒三十一年の秋（七月～九月）のことであろう、遊学先の南京から遙か紹興の実家、覆盆橋周氏新台門の野菜畑、百草園――少年時代に兄魯迅らと遊んだ思い出の場所――のことを懐って「秋草園」詩[16]を詠んでいる（百草園の一番味わい深い時期は草木が衰えつつある秋にありと見た周作人は百草園を秋草園と称した。写真Bは今日の百草園、一九八九年九月筆者撮影）。百草園は魯迅の小品「百草園から三味書屋へ」によって世に知られるようになり、新中国成立後に周作人も『魯迅の故家』の中で詳述している。

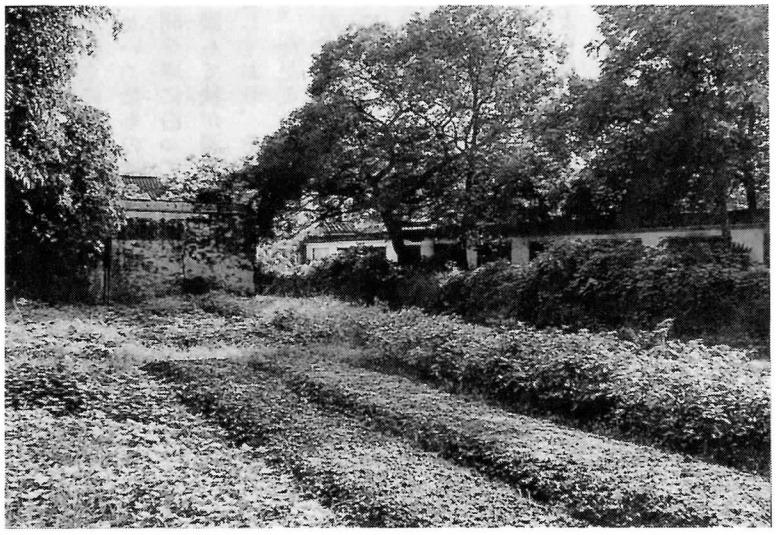

写真　B

周作人は翌光緒三十二年春（一月～三月）に、本詩や次の「乙巳除日」、「寒食」など南京に来て以来詠んだ旧詩を集めて『秋草園閑吟』（散逸）を編み、「『秋草閑吟』序」を書いて百草園に対する特別な愛着を示した。彼の百草園に対する愛着振りは、当時の日記を『秋草園日記』と称したり自ら「秋草園客」と号したりしたことにも示されている。周作人にとって、いずれ枯れてしまう秋草の生い茂る百草園は没落した実家や保守的で活気のない故郷紹興のシンボル的存在であり、従って百草園への愛着は実は実家や紹興への愛着と同義ということになる。更に言えば、周作人に於ては百草園は滅亡の危機に瀕している祖国中国、科挙不正事件に連座して秀才の資格を剝奪され失意のうちに病死した父親の伯宜公（伯宜公には恐らく百草園にであろう、小楼を建て静寂のうちに読書したいという夢があった）[17]、それに浮き草の如き儚い存在である自分自身のシンボル的存在でもあり、従ってその百草園への愛着の裏には祖国愛、亡き父親への愛、それに自己愛が秘められていると言えよう。また百草園への愛着には、先に取り上げたその伝統的虚無主義（「楽死主義」）も関係しているものと考えられる。参考のため「『秋草閑吟』序」（『知堂回想録』六三「五年間の回顧」に引く）を以下に訳出する。

我が家は、会稽は東門［五雲門］を入って三四華里［一華里

は約五百メートル」の所にある。そこは辺鄙な場所で、町なかから随分離れていた。先祖の建てた敝屋は数棟からなり、一時風雨を凌ぐには十分である。家屋の裏手に菜園があるが薄暗く、これといったものは植わっていない。枯れた桑の木と悲しげな柳の間を屏に沿ってそぞろ歩くと、白露が降りるたびに秋草が園に満ちて秋が深まっていることに気づく。私は心からこの園を愛しており、そのため自ら園客と号して時折り小詩を詠んできた。ただこの七八年来、詩を得ては捨てるといった調子であったので、削って一小帙を作れるだけの詩は残っているものの、すでに多くは腐草となってしまった。今春は格別なすべきことがないため、そのうちから一二を拾い採り、園を忘れまいとの気持ちを込めて秋草と名づけた。ああ、人の生涯に於ては何事も取るに足らず、この茫漠たる人生に対して恨み嘆かざるをえない。前世の因縁ははっきりしており、野の花や秋草の命は私の命より長い。園内の奥深い小山に占いで場所を選んで家を建てて住めよとの父の教えはまだ耳に残っているが、そこにはただ紋竹が虚しく生えているだけであり、今の私には何とも言えない。園はあるものの、今は住めないのだ。そこで園内の声や音の力を借りて詩を詠んだ。泣きわめいたり歌ったり、ミミズクと山鬼が月に向かってうそぶいたり、或いは秋風が悲しげにハコヤナギの木を揺るがしたりする。亀山［紹興府城南門外にある小山。周家の祖墳があり、当時周氏兄弟の父親伯宜公の柩が安置されていた］の松柏は実に青々としていたが、園内の椿も変わりなく青々としているだろうか。秋草は黄色く色づき、まるで夢の世界に入り込んだかのようだ。かりに今暖かい春風が吹いてきたとしても、緑色を配することはできない。南郊の野原をよぎると、どうしても恨み嘆いて涙を拭うことになる。

丙午の春、秋草園客記す。

周作人の故郷を懐う気持は南京に来て以来一貫してあったと考えられ、例えばこの年の二月の日記に次のような記述がある。

朝天宮［南京の西北にある宮殿］に行ったところ、誰かが小さな池で魚を捕っていた。一生懸命捕っていたが収穫は少なく、大抵はドジョウの類であった。故郷の菱蕩（リンタン）［浅い湖沼］でハヤを釣ったのを思い出したが、この楽しみはもう二度と味わえまいと思ったとたん、故郷を懐う気持ちが湧き起こってきた。

だがこの年の秋から翌年の春にかけて、周作人の故郷や故郷の実家、それに百草園を懐う気持ちは一際募ったように見える。それは恐らく自分の将来に対する不安——具体的には兄魯迅がいる日本への留学の見通しが立たないことへの不安、冬に北京練兵処が実施した留学試験（海軍の学習が目的）を受けてからはその結果への不安、そして学科試験は通ったものの体格検査が近視のため不合格となり同じ理由で体格検査が不合格となった呉秉成とともに学堂に取り残されたことによる不安が背景にあり、これらの不安が彼を一層感傷的にさせていたものと推察できる。人が生きることの厳しさを痛感していたことが青年周作人を一段と感傷的にさせ百草園や故郷への懐いを一層募らせたものと推察される。

㉒ 秋草園（七絶二首）

大隄春日多游女　大隄（ダイティ）の春日（シュンジツ）　游女多し
客路西風少敝裘　客路（カクロ）の西風　敝裘少（か）く
勝地雖多難著我　勝地（ショウチ）は多しと雖も　我をして著（つ）かせしむるは難し

不如帰臥故園秋　帰りて故園の秋に臥するに如かず

「大隄」の「隄」は堤、堤防、土手の意、「大陡」で大きな土手、長い土手、ここは遊覧の地として名高い秦淮河の土手のこと（両岸に歌楼や舞館が立ち並ぶ）。「春日」は春、立春の日の意、ここは単に春のことを言う。「游女」はぶらつく女性、遊覧する女性。「客路」は旅路、他郷の道の意、ここは後者。「西風」は西から吹く風、つまり秋風のこと。「少」は欠く、無いという意。「敝裘」はボロの皮ごろも（防寒用）、「敝」は謙遜の意、没落士大夫の家の子である周作人に皮ごろもを買う経済的余裕は無かった。「勝地」は景勝地のこと。「著」は執着する、溺れる、未練を持つという意、ここは使役用法。「不如」は～に及ばない、～にかなわないという意。「臥」は横たわる、横になって眠る、休む。「故園」は古い園、転じて故郷の意、ここは一義的には無論百草園のことだが、故郷の意味にとったとしても必ずしも誤りとは言えまい（⑱「春日坐雨有懐予季并柬豫才大兄」第二首［「周作人詩話三」］参照）。

韻字は裘、秋、韻は尤韻下平（ちなみに起句の末字女と第二首起句の末字許は同じ語韻上声）。

幽居卜築在何許　幽居を卜築せんとせしは何許に在る
独樹差牙秋草長　独樹は差牙し　秋草は長し
非不欲栽花満塢　花を栽えて塢を満たさんと欲せざるに非ず
四山無奈已邪陽　四山　邪陽の已れるを奈するとも無し

「幽居」は隠居するための住まい、奥まった寂しい住まい、ここは前者。「卜築」は占いで場所を選んで家を建てる意。「何許」は、どこの意、場所を聞く言葉。「独樹」は一本の木。「差牙」は差互、差錯に同じ、交わる、入り乱れるの意。「非不」は～しないわけではないという意。「塢」は屏のようなもので周囲を囲まれた場所、真ん中が窪んでいる所、花塢で花畑の意。「四山」は周囲の山の意。「無奈」は～をいかんするともなし、残念乍ら～をどうしようもないの意。「已」は去る、下がる、退くの意。「邪陽」の「邪」は「斜」に同じ、「斜陽」は夕陽のこと。

韻字は長、陽、韻は陽韻下平。

訳　秋草園

春ともなれば長い土手の上を女たちがぶらつく
異郷の道に秋風が吹くも寒さ除けの皮衣がない
景勝地にはこと欠かないけれど愛着は覚え難い
帰郷して古園の秋の中に横たわった方がましだ

父が隠居部屋を建てようとしたのはどこなのか
一本一本の木が交差し秋の草が長く茂っている
花畑一杯に花を植えようとしないわけではない
周囲の山々が夕陽が沈むのを止められないだけ

同年の大晦日、十二月三十日（新暦一九〇六年一月二十四日）に周作人は「乙巳除日」詩を詠んで故郷を懐った。

㉓　乙巳除日（七絶）

転眼三百六十日　転眼に三百六十日をふ
衰草無言風雪悲　衰草無言にして　風雪悲し
独向圭山望松柏　独り圭山に向ひて松柏を望まんとし
夜烏啼上最高枝　夜烏啼きて　最も高き枝に上る

「乙巳」は光緒三十二年の干支。「除日」は除夕（大晦日）に同じ。「転眼」は瞬く間にの意。「三百六十日」は一年のこと。「衰草」は、ここは枯れ草の意。「風雪」は吹雪或いは風と雪の意、ここは前者。「独」は一人で、ただ～のみの意、ここは前者。「圭山」は故郷紹興の南郊にある小山亀山（前出）のこと、「圭」と「亀」は発音が同じ。「松柏」は松とコノテガシワの意、いずれも年中青く茂るところから人の苦難に遭ってもその節操を堅く守って変わらないことの喩えに使われる、ここは周作人の故郷紹興がいつまでも変わらないこと、また変わらないことを信ずる気持ち、更には故郷（百草園、実家、亡き父親等を含む）を懐う気持ちや日本への留学を願う気持ちが一貫して変わらないことをなどをも兼ねて言っているのだろう。「夜烏」は夜に烏がの意ではなく、夜に鳴く夜ガラスのこと、ここは故郷を懐って一人涙を流す周作人自身を言う。「最高枝」は、ここは南京にある樹木の中で一番高い枝のこと。

韻字は悲、枝、韻は支韻上平。

訳　乙巳除夕

今年もあっという間に一年の月日が過ぎ去った
枯れ草は何も言わず吹雪が悲しげに吹き荒れる
自分だけで亀山の青々とした松柏を眺めようと
夜ガラスが啼きながら南京の一番高い枝に上る

更に周作人は同年の寒食節に「寒食」詩を詠んでいる。寒食節は節気の一で、三月の清明節（春分から十五日目。墓参りの日）の二日前或いは前日。この日は火を使ことを禁じられており、予め作っておいた冷食を食べる。またこの日、墓参りに出かける。地方によっては清明節のことをいう。寒食については、⑱「春日坐雨有懐予季并柬豫才大兄」第二首（「周作人詩話三」）を参照のこと。

㉔　寒　食（五律）

客裏逢寒食　客裏にて寒食に逢ふ
春光黯淡過　春光　黯淡として過ぐ
柳条南浦尽　柳条は南浦に尽き
月色北邙多　月色は北邙に多し
哀楽随心相　哀楽は心相に随ひ
人天証羯磨　人天は羯磨を証す
踏青何処去　踏青　何処に去かん
野哭遍山河　野哭　山河に遍し

「客裏」は故郷を離れて旅にある間、旅行中の意、ここは南京に遊学中にの意。「寒食」は寒食節のこと（『越社叢刊』第一集に収められている本詩には、第一句の頭字［客］の所に第七句の頭字である踏が印刷されていたりするなどの誤植がある。本訳は陳子善氏の補正［前掲「知堂佚詩集録」参照］に従った。写真C参照）。「春光」は春の日和（日差し、光）、春の景色の意、ここは後者。「黯

秋草園　　合稿　周作人　起孟

大隄春日多游女客路西風少敝裘聯地雖多難著我不如歸臥故園秋
幽居卜築在何許獨樹差牙秋草長非不欲栽花滿塢四山無奈已邪陽

乙巳除日

轉眼三百六十日衰草無言風雪悲獨向圭山望松柏夜烏啼上最高枝

寒食

踏裘逢寒食春光漸澹過柳條南浦肅月色北邙多哀樂隨心相人天證褐磨
青何處去野哭遍山河

写真　C

淡」は薄暗く生気のないこと、暗く不鮮明なこと。「柳条」は柳の枝。「南浦」は地名ではなく南に面した水辺の意。「尽」は終わる、無くなるの意。「月色」は月光のこと。「北邙」は墓地のこと。「哀楽」は悲しむことと楽しむこと、哀楽の感情をいう。「心相」は感知できる心、心の行相（見方）（以上仏教用語）、考え、意見、興味（以上呉方言）、ここは前者であろう。「人天」は仏教用語で六道中の人道（人間）と天道（天上）、人と天の意、ここは前者であろう。「証」は証明する、偽りがないことを裏づける意。「羯磨」は果てしない因果応報を引き起こすカルマ（業）のこと。「踏青」は春の清明節の前後に郊外を散歩すること、ここは踏青節（清明節の別称）のこと。「野哭」は本来は帷を張り神位を設け礼を備えないで哭することを、ここは野原で死者の死を悼み声を挙げて哭くことをいう、周作人の家族で周作人の誕生後に亡くなった者は妹端姑（一八八九年卒）、父親伯宜公（一八九六年卒）、四弟椿寿（一八九八年卒）、祖父介孚公（一九〇四年卒）。「山河」は山と河、天下、祖国（郷土）の意、ここは山と河。

韻字は過、多、磨、河、韻は歌韻上平。

訳　寒食節

旅先の南京で寒食節を迎えた
春の薄暗い景色が過ぎてゆく
柳の木は南面する水辺止まり
月光は墓地に満ち溢れている
哀楽の情は心の在り方次第だ
人と天の道は因果応報の証し
踏青節には一体どこへ行こう
山河の到る所に泣き声が響く

光緒三十二年の晩春から初夏にかけて、三、四月頃、両江総督代理の周馥（字は玉山）[18]が学堂を訪れて周作人たちに対して面接を実施し、約一ヶ月後の四、五月頃に周作人たちの日本への留学が正式に決定した（江南督練公所からの派遣。名目は建築学の学習のため）。同年の秋、周作人は日本に留学するべく一時帰国していた兄魯迅に伴われて東京に赴く。魯迅や周作人たちはこの年から翌年の夏頃にかけて留学先の日本で文芸雑誌『新生』（その由来について魯迅は「新しい生命」の省略形であるとする）を発刊しようとしたが有力な金持ちの書き手に逃げられて頓挫している。この『新生』文学運動は一種の文学功利主義の立場から西洋の小説や詩によって中国人の劣悪な国民性を改造することを目指したものである。『新生』に掲載する予定であった魯迅の文章が『河南』に掲載されたこ

とはよく知られた事実である。

翌光緒三十三年五月発行の『天義報』[19]第四期に「絶詩三首」が載った（「来稿」欄。署名は独応[20]。『知堂雑詩抄』所収時に「偶成」と改題）。表題の下に「女界を諷刺する」（原文は「刺女界也」）という割注が施されている。留学時代唯一の詩作。本詩は、結婚して家庭に入るという旧来の女性が歩んできた道にあきたらず「新生」（新しい生活、新しい人生）を求めて日本に留学したものの、結局は結婚のための料理や裁縫の学習に明け暮れている「進歩的」清国女子留学生を諷刺している。作者自身この詩について「擬古詩であるが、実はすでに打油詩［戯れうた］の精神を帯びている」と述べている（「雑詩題記」）。周作人の脳裏にあった彼女たちと正反対の留日女性の典型は、同郷の女流反清民族革命家秋瑾である。秋瑾はこの年の六月、紹興出身の革命家徐錫麟が五月末安徽省安慶で巡撫恩銘を刺殺したのに呼応して紹興で蜂起するも失敗し、徐錫麟同様逮捕され処刑されている。

なお、これに先行する中国の女性の生き方を批判したり彼女たちを奮起させようとしたりした周作人の作品に、前掲の『侠女奴』と「女禍伝」、女猟師がライオンを捕まえるという内容の短編小説「女猟人」（『女子世界』第十三期［一九〇五年］）、それに周作人の母方の従姉妹をモデルにしたと思しい「好花枝[21]」（『女子世界』第十三期）などがある。フェミニスト周作人はすでに若い頃から女性の運命に深い関心を寄せていたのである。

以下、詩は『天義報』に掲載されたものによる。

㉕ 偶　成（五絶三首）

為欲求新生　新生を求めんと欲するが為
辛苦此奔走　辛苦して此に奔走す
学得調羹湯　羹湯を調ふるを学び得たり
帰来作新婦　帰り来りて新婦と作る

「偶成」は偶然にできた作品、偶作。「新生」は新しい生活、新しい生平（人生）の省略形、ここは男性は旧来の官僚となって升官発財を目指す道を捨て女性は旧来の家庭の主婦（良妻賢母）となる道を捨てて民主共和男女平等の中華民国を目指す革命改革の徒となる道を歩む意。「辛苦」は苦労する、骨を折るの意。「此」は、ここ、現代中国語の「這里」に同じ、日本（東京）のこと。「奔走」は急いで赴く意。「調羹湯」はスープの味を調えること、ここは広く料理することをいうのだろう。「帰来」は、ここは清国に帰って来てという意。「作新婦」は新婦（妻）となるの意、「新しき女性」（周作人「婦女選挙権問題」［後出］参照）とならずに旧来の新婦となったということ。

韻字は走、婦、韻は有韻上声。

不読宛委書　宛委なる書を読まず
却織夘央錦　却て夘央の錦を織る
織錦長一丈　錦を織ること長さ一丈
春華此中尽　春華　此の中に尽く

「宛委」は紹興の東南十五華里にある山の名（会稽山の支峰）、夏禹が金簡玉字の書を得た所、のち蔵書場所に喩えられる。「書」は手紙ではなく本。「宛委書」で図書館の本のことか。「夘央」は「鴛鴦」（オシドリ）の古字、こうした古字の使用は当時の清朝以前の

ものなら古ければ古いほどよいという反清民族革命思想に基づく「復古主義」によるもの、周作人は後に「鴛鴦」に改める、「錦」は絹織物、「夗央錦」でオシドリの柄を織り出した夫婦用の錦。「春華」は青春年華のことで、青春（時代）の意。「此」は長さ一丈の錦を指す。「尽」は極める、出し尽くすの意。

錦（寝韻上声）と尽（軫韻上声）は通用ではないが（破格）、音は似ている。

出門有大願　門を出でて大願を有するも
竟事不一吷　事を竟へるや一吷もあげず
碌碌墜庸軌　碌碌として庸軌に墜つ
芳徽永断絶　芳徽　永に断絶す

「出門」は家を出ること、嫁入りすること、ここは前者。「有」は後に「懐」に改める（意味は同じ）。「大願」は大いなる願望、ここは「新生」を手に入れることをいう。「竟事」は　事を終える意、ここは留学を終えて帰国すること。「吷」は小さい声、「一吷」で一声の意、「不一吷」で一声も発しない意、ここは革命改革の声を挙げないこと。「碌碌」は平凡な様、後に「款款」（一人楽しむ様或いはゆっくりの意、ここは前者）に改める。「庸軌」は愚かで平凡な道、ここは結婚して家庭の主婦となる道をいう。「芳徽」は栄誉ある立派なことの意、ここは中国の古代からの女侠の伝統をいう（⑳「題『侠女奴』原本」詩第十首参照）。

韻字は吷、絶、韻は屑韻入声。

訳　偶　作

新しき生活を求めんがため
苦労してこの日本に来たが
スープ作りを修得しただけ
帰国して新婦となるために

図書館の書籍を読まずして
なんと鴛鴦の絹織物を織る
絹織物を織ること長さ一丈
青春時代はこの中に尽きた

門を出でて大願を抱いたが
事を終へるや一声も挙げず
従来の平々凡々な道を歩む
美しい伝統は永遠に絶えた

宣統元年（一九〇九）、周作人は魯迅の恋人であった羽太信子と結婚し（当時周作人はそのことを知らないまま結婚した）、帰国して杭州の浙江両級師範学堂の教員ついで紹興府中学堂の教員兼監学となった魯迅の仕送りに頼って、最初はそれまで魯迅と住んでいた本郷区西片町十番地はノ十九号の一軒家で、宣統二年（一九一〇）十一月からは麻布区芝森本（元）町の一軒屋（二階屋）で、宣統三年に帰国するまで夫婦水入らずの生活を送り、傍ら立教大学予科商科に籍を置いて同じ立教大学の文科や東京三一神学校に通って古代ギリシャ語を学んだ[22]。日本語が堪能な魯迅が帰国したことで却って日本語能力が向上し、落語や狂言など江戸の平民文学に心底馴染み、

故郷紹興の素朴な料理と似ていたこともあって気に入っていた日本食をいよいよ愛で、次第に帰国の意志が弱まっていった。宣統三年、立教大学を「家事の都合」を名目に二年で中退すると、周作人は引き続き日本でフランス語を学習することを希望して帰国を渋った。帰国を嫌がる気持ちは相当強く、手紙による催促では埒があかないとみた魯迅がわざわざ二年振りに渡日して説得したほどである。

同年五、六月頃に日本への未練を残したまま帰国した周作人は、日本への思いを絶ち難く「夢」の世界に耽っていた。周作人を「夢」から醒ます契機となったのが、八月十九日に起こった武昌起義（辛亥革命）である。革命勃発の約二週間後、九月一日に周作人は前年の秋に大隅川に魚釣りに出かけた時のことを記した文章を書き写した後に、「虹の色」のような懐旧の美の表現が到底不可能であることの悲しみを記した付記を加え、更にその六日後の九月七日に「詩一首」を詠んで付記の後に記した。「夢」から醒めかけた意識の中に却ってありありと脳裏に去来する「夢」の世界、この「夢」の世界を記憶の片隅に封じ込めようと、必死に自らに「覚醒」を強いている周作人の苦悩が忍ばれる詩である。この詩は、革命の嵐が吹き荒れている最中であるにもかかわらず、依然として「夢」の世界に引きずられていた周作人の留日体験の重みを象徴していると言える。[23] 省都杭州と紹興が革命軍に占拠されたのは、この一週間後の九月十四日のことである。

㉖ 詩一首（五言古詩。六句）

遠游不思帰　遠きに游びて帰るを思はず
久客恋異郷　久しく客たりて異郷を恋ふ
寂寂三田道　寂寂たる三田の道
衰柳徒蒼黄　衰柳　徒らに蒼黄たり
旧夢不可道　旧夢　道るべからず
但令心暗傷　ただ心をして暗かに傷ましむるのみ。

「遠游」は遠くへ遊学すること、ここは無論日本に留学すること。「久客」は長逗留している異郷の人、ここは周作人のこと。「恋」は思う、忍ぶ、恋しく思う、別れ難く感ずること。「異郷」は周作人にとっての外地、外国、ここは後者（日本）。「寂寂」は寂しく静かな様、閑静な様、閑散とした様。「三田」は地名で現港区と現目黒区にあるが、ここは慶応大学のある前者、当時は芝区に属し、夫婦が住んでいた麻布区芝森本町の南、周作人がよく散歩した界隈であり、周作人が坂本文泉子の『如夢記』を購入したのも三田を散歩中のことであった（周作人の「如夢記」［『薬堂語録』所収］に「三田は大きな通りだが、大抵は夕方に散歩に出かけるだけの場所であった。どうしても暗澹かつ閑散とした印象が拭いきれず、本郷とは異なる。辛亥の年の初冬［実際は夏頃］に帰郷し、小文を書いて旧遊を記したが、僅か一篇書いたにすぎない。その後ろに題した詩に見える『寂寂たる三田の道、衰柳何ぞ蒼黄たる』の句はたぶん概ねこのことを言ったものだろう。これも今ではもう旧夢となってしまった」とある）。「道」は通り道、筋道。「衰柳」は葉色の衰えた柳。「徒」は空しく、無駄にの意。「蒼黄」は灰色がかった黄色、青味がかった黄色。「旧夢」は以前見た夢の迹、転じて過ぎ去った儚いこと、ここはほぼ五年間に及ぶ東京での留学生活のこと。「追」は振り返る意。「暗」は秘かにの意。「傷」は痛み悲しむ意。

韻字は郷、黄、傷、韻は陽韻下平。

訳　詩ひとつ

遠国に遊んで帰りたくなくなった
長く逗留して異国に恋い焦がれる
静まり返った三田界隈の道筋には
衰柳の黄ばんだ枝葉が垂れている
昔の夢を書き留めるのはよくない
ただ密かに悲しい思いを抱くだけ

周作人は帰国後、民国元年（一九一二）年二月（以下、新暦）に杭州の浙江省軍政府教育局課長に就任し、ついで視学に改められるも、妻信子の出産が迫っていたため赴任が遅れ、実際に赴任したのは長男豊丸（のち豊一と改名）出産後の同年七月頃（九月に病気のため辞職し帰郷）。

同年七月当時、紹興の浙江第五師範学校に范愛農という人物が学監として勤めていた。范愛農は魯迅の日本留学時代の知り合いであり、二人は辛亥革命後浙江山会初級師範学堂（民国成立後浙江第五師範学校となる）で同僚となって以来（魯迅は校長）、無二の親友となった。その後魯迅は南京臨時政府の教育部に赴任し、范愛農は紹興に残った。范愛農は魯迅や周作人同様新思想の持ち主であったため、かねてより魯迅の後任校長で後に孔教会会長となる傅励臣や師範学校の同僚（職員）で中華自由党紹興分会幹部の何幾仲ら保守派により圧迫されていたが、三四月頃赴任先の南京から里帰りのため帰郷していた魯迅が新たに中華民国政府が置かれることになった北京に去った後、保守派による排斥が一層強まって学堂を去り（五月一日）、最後は水に落ちて亡くなった（七月十日）[24]。魯迅は周作人から親友范の死を知らされて嘆き悲しみ（同月十九日）、「哀范君三章」（五律三首）を作って（同月二十二日）、周作人に寄せた（八月二十一日の紹興『民興日報』掲載）。周作人の詩作は恐らく魯迅の詩に触発されたのであろう。七月二十七日付の書簡に添えて本詩を魯迅に送っている（八月二日付『魯迅日記』による。魯迅は日記に本詩を書き留めている）。本詩は魯迅の「哀范君三章」と一緒に八月二十一日の『民興日報』に掲載されたという（標題は「哀愛農先生」）。魯迅が日記に書き留めたものと新聞に掲載されたものとでは一部字句が異なるが、恐らく後者は魯迅の修改を経たものであろう。周作人が新中国成立後に書いた『知堂回想録』九四「辛亥革命（三）――范哀農」で引いているのは『民興日報』に掲載されたもの（『知堂雑詩抄』に収められているものも同じ）。

以下、詩は『魯迅日記』に書き留められたものによる。

㉗ 哀范愛農（五言古詩。十二句）

天下無独行　天下に独行するもの無く
挙世成委糜　世を挙げて委糜を成す
皖皓范夫子　皖皓たる范夫子
生此叔季時　此の叔季の時に生まる
傲骨遭俗嫉　傲骨　俗嫉に遭ひ
屢被螻蟻欺　屢ば螻蟻に欺かる
佗傺尽一世　佗傺のうちに一世尽くるも
畢生清水湄　畢生　清き水湄にあり
今聞此人死　今此の人の死せるを聞き

令我心傷悲　我をして心に傷み悲しましむ
擾擾使君輩　擾擾（ジョウジョウ）たる使君の輩（やから）
長生亦爾為　長生（チョウセイ）するも亦（かくのごとく）爾（な）く為さん

「哀」は悲しみ悼む意。「天下」はあめが下、世の中という意。「独行」は志操が高邁で世俗に流されない、節操を高く持して世俗に左右されない、自分の考え通りに行動するの意。「挙世」は世間の人全ての意。「委糜」の「糜」（爛れる、滅びる、費やす、疲れる）は「靡」（しなう、衰える、弱る、滅びる、費やす）の誤り（「委糜」なる語はない。但し両者は通用する場合がある。韻は同じ）、発表時に「靡」に改められる、「委靡」は衰えて振るわないの意（「委靡不振」）。「皖皓」は清く潔白な様をいう。「范夫子」の「范」は范愛農のこと、「夫子」は学生の教師に対する尊称、併わせて范先生。「叔季」は叔世と季世のことで、いずれも末世の意、周作人は当時の道義人心の廃れていた中国の世を「澆世」（末世）と見ていた、発表時に「寂寞」に改められる（「寂寞」はひっそりとして寂しいこと、周作人や魯迅たちは「悲しみ、恨み、絶望の中に国民を発憤させる『哀弦』［文人］と『哀音』［作品］がなく、そのため人々が国の悲惨な現状をよそにうかれ騒いでいる状況」を「寂寞」と呼んでいた）。「傲骨」は自らを高くして人に下らない気性、ここは范愛農の気性をいう（唐の李白はその腰に傲骨があるため人に屈することができないと世人が評したといわれ、また明の袁宏道に「傲骨終然として白眼に遭ふ」［傲骨終然遭白眼］という詩句がある）。「俗嫉」は俗人の妬み、発表時に「俗忌」（世俗が忌み嫌うこと）に改められる。「被」は受け身を表わす言葉、発表時に同じ受け身を表わす「見」に改められる。「螻蟻」はアリとオケラ、転じてごく軽微なつまらぬもの、小人に譬えられる、ここは小人の意、発表時に「螻蟻」（意味は「螻蟻」に同じ）に改められる。「佗傺」は失意の様、不運であること、発表時に「坎壈」（カンラン）（意味は「佗傺」に同じ）に改められる。「尽一世」は生涯を終えること、発表時に「尽」は「終」（意味は同じ）に「一世」は「一細」にそれぞれ改められる（前掲『知堂回想録』九四「辛亥革命（三）――范哀農」による。但し「一細」なる語はなく、これは『知堂回想録』の誤植の可能性がある）。「畢生」は生涯、一生の意、「清」は清く澄んだという意、「水湄」は水のほとり、水際の意（この句は「生を清き水湄に畢（お）ふ」とも読める。作者は本句に最初から二通りの意味を込めていたとみられる）。「今」は発表時に「会」（たまたま～ということに出くわすという意）に改められる。「心」は心の中で、心秘かに、心よりの意。「擾擾」は掻き乱して騒ぎを起こす意、発表時に「峨峨」（なり形が厳めしく盛んな様）に改められる。「使君」は使節や州郡の長官の尊称、ここは紹興県軍政分府都督の王金発のこと、王金発はもともと革命派に属していたが（旧知の魯迅を山会初級師範学堂の校長に任命したのも王金発である）、都督就任後次第に保守派に取り込まれ魯迅たちと対立するようになった、「使君輩」は王金発とその取り巻きの保守派。「長生」は長生きする意、ここは范哀農が今死なずに長生きしたとしてもという意。「爾」は、このようにの意、具体的には保守派が范哀農を迫害することをいう、発表時に「若」（意味は「爾」に同じ）に改められる。

韻字は糜、時、欺、湄、悲、為、韻は支韻上声。

訳　范哀農を悼む

世に孤高を持する者はなく
世人は悉く元気を無くした
かの清廉で潔白な范先生は
この末世に生を享けられた
誇り高き人は俗物に妬まれ
小人連中に虐げられ続けた
不遇のまま生涯を終えたが
生涯清い水辺に身を置いた
今し方この人の死を聞いて
ひたすら悲嘆にくれている
騒ぎを起こした長官一派は
生き長らえても害するはず

註

※　引用文中の（　）は原註、［　］は引用者註。

（1）　光緒二十九年十二月（一九〇四年）創刊。江蘇省常熟女子世界社編。上海大同印書局発行出版。編集長は丁初我。辛亥革命前の婦女雑誌の一つ。婦女の自立と女権の拡張を唱え、婦女も国難に当たる責務を負わなければならないとする。光緒三十二年（一九〇六）頃、第二巻第四・五期合併号を以て停刊。全十七期。光緒三十三年（一九〇七）六月に続刊一期（第二巻第六期）、南潯の陳勤編。北京図書館蔵。

　ちなみに同誌第二巻第四・五期合併号の「史伝」欄に載った病雲作「女禍伝」（『旧約全書』中のエバ［イブ］についての話を題材とする）は周作人のものと推察され、陳子善張鉄栄共編『周作人集外文（一九二六―一九四八）』（海南国際新聞出版中心出版。一九九五年）も収録している。

（2）　萍雲女士については「周作人詩話三」⑲「偶感」詩参照。なお周作人は、当時男子が女子の名を借りて投稿する際に花字を用いる傾向があることを暗に批判して「花字を女子の代名詞とみなすのは不適切であるということについて論ずる」を書いている（『女子世界』第五期［一九〇五年］登載。署名は呉萍雲）。

（3）　碧羅は碧色の薄絹という意。

（4）　上海図書館蔵。

（5）　筆者が閲覧した他の版本に光緒三十二年五次重版本（上海四馬路文盛堂書局発行。五角）がある。

（6）　故松枝茂夫氏蔵。

（7）　どういうわけか『俠女奴』の表紙絵に『玉虫縁』（後出）の表紙絵と思しき絵が使われている（『玉虫縁』の表紙絵は未見）。

（8）　上海図書館蔵。「緒言」（乙巳初春萍雲序於建業客次）、「例言」、「訳者識」、「附識」（乙巳上元訳竟識）、「附叙」（乙巳暮春初我識於文明長寿室）。筆者が閲覧した他の版本に光緒三十二年四月再版本（上海小説林総発行所。上海図書館蔵）がある。

（9）　兄の魯迅が梁啓超らの唱える改良思想から民族革命思想に転じたのは、愚見によれば光緒二十九年閏五月に上海で起こった蘇報事件以降のことである（拙論「魯迅――『自題小像』詩成立考」［信州大学人文学部『人文科学論集』第16号（一九八二年三月）］参照）。周作人の改良思想から民族革命思想への転向時期については定かでないが、筆者は光緒二十九年五月に軍国民教育会（拒俄義勇隊、学生軍の後身）が新聞『蘇報』を買収改組してから閏五月に蘇報事件が発生するまでの間、つまり『蘇報』が主筆に章士釗を迎えて盛んに排満革命を鼓吹していた時期を中心とする頃のことと推察する（拙論「周作人――『文人』意識の成立」（咿啞の会『咿啞』10号［一九七八年六月］）第三章「『文人』意識の形成第二部」〔2〕「西洋文学との出会い」参照）。両者の転向の時期は、異国日本に身を置いていた魯迅より江南水師学堂の同級生と共に拒俄義勇隊への参加を画策するなど激動の渦中にあった周作人の方が時期的に早かった

可能性もある、というのが筆者の現在の推測である（無論魯迅同様に蘇報事件に刺激を受けてのこと、或いは転向した魯迅の影響を受けてのこととも考えられる。いずれにせよ、以上全て推測の域を出るものではない）。但し魯迅は浙江の民族革命党光復会に加入したけれども、周作人については革命党への参加を裏づける資料は今のところない。

(10) 光緒三十年の『周作人日記』に記録されている「三月中の感情と思想の変遷」（『魯迅研究資料』第十二輯所収）参照。

(11) 「楽死主義」の昂じた原因の一つに周作人自身の恋愛問題があった可能性がある。周作人の「娯園」（『雨天の書』）に「南京時代に日記に感傷的な言葉をたくさん書きつけたが（すぐ後に全て切り取ったので、今はその内容を覚えていない）、最後まで結婚のことは考えなかった。十二年間他郷をぶらついたのち帰郷したが、その時我々には息子と娘がおり、彼女もとっくに嫁いでいて、しかも持病を患っていてすでに死と直面していた。その後数回会ったが、私は再び家を離れ、彼女はほどなく静かに息を引き取った。今もなお彼女の若い頃の写真が一枚だけ母のところに残っている。というのも、彼女が後に自ら私に語ったことだが、彼女は正式な儀式は執り行わなかったものの私の母の義理の娘であったからである」とあるが、南京時代で周作人が最もこの恋愛（片想い）で苦しんだのは、この時のことか。この女性は、同文によれば周作人の母方の伯叔父の娘で（母親魯瑞の兄魯怡堂の娘珠姑）、周作人と同年同月の生まれ、周作人が生涯で二番目に好きになった女性であり、少年周作人は魯怡堂の一人息子（延蓀。珠姑の兄）の結婚の時に初めて彼女に会って恋に落ちたが、自分の容貌に劣等感を抱いていた周作人は、彼女にはすでに幼い時期に決められていた結婚相手（李孝諧。親戚である紹興南街の外科医李介甫の息子で、魯迅の三味書屋時代の同級生）がいたこともあって、自分の想いを打ち明けられなかった。「周作人詩話三」の冒頭に掲げた新詩「彼女たち」に登場する三人の「恋人」（いずれも周作人の片想い）のうち、「彼女は嫁いでから亡くなった」、「彼女の写真は母の手元にあり、私は敢えて会いに行く気はない」、「一人の朦朧たる姿だけが脳裏に残っている。だが、この朦朧たる姿が最も私の心を引きつける。記憶が薄れるほどに、彼女のことが忘れられない」の「彼女」とは、この珠姑のことである。

(12) 名は文会。仁山は字。安徽省池州府石埭県の人（後出の周馥［本文注（18）参照］は池州府建徳県の人）。周馥同様清末の北洋系洋務派官僚であったが、同時に敬虔な仏教徒でもあった。道光十七年（一八三七）生まれ（周作人の祖父周福清と同い歳）。役人としては、先ず両江総督曾国藩（湖南省長沙府湘郷県の人。楊文会の父親楊摛藻と進士同年）と直隷総督李鴻章（安徽省廬州府合肥県の人）の幕下で仕事をして手腕を認められ、ついで光緒四年（一八七八）駐イギリス、フランス公使曾起沢（現任の候補四品五品京堂。曾国藩の息子。光緒十一年［一八八五］帰国。光緒十二年［一八八六］卒）の随員となり、光緒十二年駐イギリス、ロシア公使劉瑞棻（現任の太常寺卿、ほどなく大理寺卿に。安徽省池州府貴池県の人）の随員となる。欧州滞在中に西洋の政情、それに科学技術についての造詣を深め、列強立国の淵源を探る。帰国後、官界を辞し閉戸読書の生活に入る（光緒二十三年［一八九七］に南京の延齢巷に自宅を建てる）。

一方仏教については、同治三年（一八六四）に大病を患ったことを契機にすでに入手していた『大乗起信論』を読んで仏教徒となる。翌年に南京に移ってから同志と延齢巷に金陵刻経処を創設し、公務（最初は江寧公房建築の監督を勤め、ついで同治十三年［一八七四］に江寧籌防局差となり下関（シアコワン）で砲台と砲房を造る）の旁ら『浄土四経』等の経典などの出版と普及に勤め、光緒二十一年（一八九五）には僧学を提唱し、最後は『大蔵輯要』を刊行しようとするも完成させることなく辛亥革命勃発直前の宣統三年（一九一一）八月卒。その仏教は華厳、唯識にも依拠しつつ浄土信仰に本当の拠り所を求めようとするものであり、清末の改革派、革命派、とりわけ戊

戊変法の中心人物の一人で門人の譚嗣同（湖南省長沙府瀏陽県の人）に大きな影響を与えた人物として知られる（譚嗣同は南京候補知府時代に刻経処に一年ほど住み『仁学』を執筆している）。沈曾植に「楊仁山居士塔銘」がある。

周作人は楊文会を訪れた時のことを『知堂回想録』六三「五年間の回顧」に「この時仏典を買って読み始めた。最初は十二月九日のことで、延齢巷の金陵刻経処に赴いて仏典を二冊買った。記憶によれば、一冊は『投身飼餓虎経』であり、もう一冊は『経指示説』であった。後者は、『起信論』の纂注本である。実を言えば、私は根っからの「信心のない」人間であって、終始読みはしたが「入信はしなかった」。私に強く影響を与えたのは投身飼餓虎の話であり、このロマンチックな本生［闍陀伽。『十二部経』（『一切経』）の第六］物語はずっと私の脳裏に痕跡を留めた。私は一九四六年に『往昔三十首』を作ったが、その第二首は菩提薩埵［菩薩］を詠んだものである。この詩の内容は他ならぬこの時のことであり、すでに四十年余りの時が経っている」と記しており、また同書二〇六「拾遺（午）」「私の雑学」十九「仏教」にも「四十年前南京の学堂にいた時、楊仁山居士を訪ねたことがあり、浄土を修めるがよいとの教示を賜った。だが私は『阿弥陀経』の各種の訳本（『羅什訳仏説阿弥陀経』等三種）を読んで、極楽浄土の描写が面白いと感じ、また先ず浄土に行ってから徳を増進させ研鑽を積むという主旨に対しても、さながら租界に住んだら一生懸命努力してみたい［勉強に励んでみたい］と願うのと似ており、言わんとするところはよく理解できたが、実行してみようという気にはならなかった」と記している。

参考のため、文中に見える「往昔三十首」の第二首（一之二）「菩提薩埵」を以下に引く（『知堂雑詩抄』等による）。

往昔読仏書　往昔　仏書を読む
吾愛覚有情　吾愛でて　情有ると覚ゆ
菩薩有六度　菩薩に六度有り
忍辱良足欽　忍辱　良に欽ふに足る
布施立弘願　布施して　弘願を立つ
顧重身命軽　顧身命の軽きを重んずるのみ
投身飼餓虎　投身の飼餓虎
事奇情更真　事は奇にして　情は更に真なり
平生再三読　平生　再三読む
感激幾涕零　感激し　幾ど涕零ちんとす
向往不能至　向往るるも　至る能はず
留作座右銘　留めて　座右銘と作す
安得伝灯火　安くんぞ伝灯［仏法を伝える意］の火を得て
供此一巻経　此の一巻の経に供せんや

(13) 原作では無論、儀鳳門外、波止場と鉄道の終着駅がある。カシムの死後弟のアリババがその寡婦モルジアナと結婚したという筋になっている。

(14) 南京の西北部。

(15) 前掲拙論「周作人――『文人』意識の成立」第三章「『文人』意識の形成第二部」〔3〕「ユゴー作品の愛読」参照。他に、当時の周作人の死生観が窺える文章に「死と生を説く」（『女子世界』第五期）がある。

(16) 本詩は次の「乙巳除日」、「寒食」とともにほぼ六年後、『越社叢刊』第一集に収められた（紹興越社編印。一九一二年二月。「越社詩録」欄。署名は「会稽周作人起孟」）。同集の編集は魯迅が担当しており、これらの詩に魯迅の手が入っている可能性がある。岳麓書社版『知堂雑詩抄』は未収。ちなみに同集には魯迅が周作人の名義（会稽周作人起孟）を以て発表した「『古小説拘沈』序」、「擬曲序」、「詩銘」と周建人の名義（会稽周建人喬峯）を以て発表した「辛亥游録」が収められている。

なお、佚詩たる「秋草」、「乙巳除日」、「寒食」を発見して最初に紹介したのは現上海華東師範大学図書館副図書館長（当時同大中文系講師）の陳子善氏である（「知堂佚詩集録」［『明報月刊』一九八九年九月号］）。

(17) 周作人「『夜読抄』小引」(一九二八年)参照。

(18) 安徽省池州府建徳県の人。李鴻章の片腕として活躍した北洋系洋務派官僚。直隷総督李鴻章の幕下に入って才能を認められ、知府、道員を経て光緒三年(一八七七)直隷省永定河道代理、翌年同省津海関道代理に。光緒九年(一八八三)天津兵備道代理を兼務。光緒十年(一八八四)在京紹興人グループの中心人物李慈銘宅を訪れこれと交流を結び、三人の息子(学海、学銘、学熙)を李慈銘の門下生とさせる(三男の学熙は光緒十九年癸巳科順天府郷試に及第したものの不正の嫌疑をかけられ覆試を受けさせられる。周作人の祖父が浙江省郷試で不正未遂事件を起こしたのもこの科に於てであり、いずれも当時世間を震撼させた科挙不正事件として知られる。学熙はその後捐納により候補道となり、父親の関係から李鴻章や袁世凱に重用され、北洋系洋務派官僚として活躍した)。清仏戦争勃発前に津海関道代理の職務を解かれる。光緒十二年(一八八六)戸部に弾劾されて革職処分を受ける。光緒十四年(一八八八)直隷省按察使に抜擢。兼同省布政使代理。光緒二十一年(一八九五)日清戦争後李鴻章が罷免されたのに伴い周も自ら病気を理由に罷免。光緒二十五年(一八九九)四川省布政使。光緒二十六年(一九〇〇)李鴻章が議和大臣、直隷総督に就任したのに伴い直隷省布政使に。光緒二十七年(一九〇一)李鴻章の死亡後兼直隷総督代理。光緒二十八年(一九〇二)山東省巡撫。光緒三十年現職。光緒三十二年七月閩浙総督(未赴任)。同年同月両広総督。光緒三十三年解任。民国十年天津にて卒。

周馥と周作人の祖父周福清(一九〇四年卒)との関係の有無は不明であるが、周馥と李慈銘との関係及び周福清が郷試及第時の副考官、張之洞の率いる洋務派に属していたとみられる点から、両者は或いは面識があったかも知れない。少なくとも周馥は周作人がかつて科挙不正未遂事件を起こして世間を騒がせた元翰林院庶吉士周福清の孫であることは承知していたものと思われる。この時の来駕と留学許可に周馥の特別の配慮が働いていたか否かは今となっては知るよしもない。

(19) 『天義報』は女性のための無政府主義雑誌で、光緒三十三年四月東京で創刊された。無政府主義者劉申叔(『河南』の編集長)の妻、何震が編集長。固有の社会を破壊し、人類の平等を実行することを宗旨とする。女界革命を提唱するほか兼ねて種族政治経済の諸革命を提唱するため「天義」と命名した。ちなみに同号には、周作人の「婦女選挙権問題」も掲載されている(署名は独応。「来稿」欄。第七期に続が掲載)。

(20) 署名独応の由来について、周作人は『知堂回想録』五三「私の筆名」に於て、出典は『荘子』だが文句は失念したとする。筆者も該当する文句を探し当てられなかったが、推察するに、独り宇宙の真の主宰者[造物者]の奏でる音楽に応じて喜怒哀楽などの感情が生起する(「内篇」第二「斉物論篇」)という意味か、もしくは自分だけが無為自然に生きる精神界の帝王となるにふさわしい者(第七「応帝王篇」)であるという意味であろう(後者か)。

(21) 主人公阿珠と同名の従姉妹は、父方の二人の伯叔母の娘と母方の伯父の娘の三人いるが(いずれも珠[姑字を添えて珠姑とも言う])、周作人がモデルにしたのは彼が恋した母方の伯父の娘(本文注(11)参照)であろう。

(22) 拙論「周作人の残した小説創作の軌跡とその意義――『社会小説江村夜話』の問題を中心として――」(『日本中国学会報』第29集[一九七七年])二「『江村夜話』をめぐる諸問題」(一)「周作人の啓明なる筆名の使用状況」(2)「希臘擬曲の訳者啓明」参照。

(23) 以上、拙論「周作人――宣統三年辛亥夏の帰国――」(中国文芸研究会『野草』第22号[一九七八年九月])によった。

(24) 以上范哀農については、拙論「魯迅の『罪』とその変容」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』[汲古書院。一九八六年])二「『罪』の意識の成立」の「范哀農の死」項等参照。